



Title	第9章 地域への評価
Author(s)	新藤, 慶
Citation	「調査と社会理論」研究報告書, 30, 148-166
Issue Date	2013-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52420
Type	departmental bulletin paper
File Information	AN00075302_30_9.pdf



第9章 地域への評価

新藤 慶 | 群馬大学教育学部准教授

第1節 本章の課題と方法

本章では、アイヌの人々が多く住む新ひだか町に対して、一般住民やアイヌの人々がどのような評価をしているかを明らかにする。

アイヌ民族多住地域における住民の生活や意識については、松本和良の研究グループが多くの成果を残している（松本・大黒編 1998；松本・江川編 2001）。このなかでは、地域の評価に関わる部分として、以下の諸点が指摘されている。まず、松本らは、アイヌの人々に対する調査から「差別や偏見のみられるところほど（『この町は子どもを生み育てるのにふさわしい町だと思いますか』という問いに対して——新藤注）『たいへんふさわしい』とか、『一生住みたい』とかの答えは少なくなっている」（松本ほか 1998： 36）と述べている。また、宇田川拓雄は、アイヌの人々と一般住民の住み心地についての意識の比較から、「ウタリの人びとは一般の人びとに比べた場合、生活環境において、人間関係、社会関係を重視しており、このことは一般の人びとが物的な利便性や個人生活を重視しているのと対照的である。……ウタリの人びとが親密な人間関係を維持しているのはマイノリティとして差別されてきたためかもしれない」（宇田川 1998： 87）と指摘している。このことから、アイヌの人々は、地域に対する評価を行う際に、一般の住民に比べて人間関係の側面を重視している可能性がある。

一方、一口にアイヌ民族多住地域といっても、その歴史的な背景は異なっている。武田朋久は、門別町のアイヌの人々への調査から、「ウタリ協会門別支部の全体的傾向性として社会的貢献意欲の高さや地域、役所への信頼感の強さ及び日常的生活態度における積極的態度が見られると同時に、アイヌ民族としての強いエスニック・アイデンティティの存在が看取される。これは門別支部の人たちが、日本国民として現代日本社会においていかに成功を収め、よりよい生活をなしうかと考えていることを示している」（武田 2001： 76）と述べ、門別のアイヌの人々が地域への高い信頼感を有することを指摘している。そして、このような門別のアイヌの人々がもつメンタリティの根源を「仮説」と断ったうえで、『御味方エゾ』としての共通感情（武田 2001： 75）に求めている。この「御味方エゾ」とは、松前藩に激しい戦いを挑んだことで知られるシャクシャインと争ったオニビシが、松前藩と比較的近い関係を結んでいたことから、オニビシの影響下にあった日高地方以西のアイヌの人々たちに松前藩が用いた呼称の一つである。門別のアイヌの人々だけが、このオニビシのメンタリティを引き継いだとは考えにくいと、和人社会への適応を示すような門別のアイヌの人々の意識は、松前藩との対決姿勢を強めたシャクシャインではなく、オニビシの振る舞いに通じるのではないかと考えられている（武田 2001）。

そして、武田はこの論文の最後で、「シャクシャインの本拠地であった静内町における今後の社

会調査の実施によって、その妥当性と有用性を判断する必要がある」(武田 2001: 77)と述べている。まさに今回は、この「静内町」を対象とした調査であるので、このような地域的な背景をふまえることも一つの論点となる。

さらに、白老町のアイヌの人々の調査からは、「年齢」と「居住年数」が住み心地と関連を持っており、それぞれ長いほど住み心地を「よい」とする程度が高まることも明らかにされている(大黒 2001: 146)。この点から、「年齢」や「居住年数」と地域への評価との関連を探ることも求められよう。

そこで本章では、新ひだか町で行った一般住民へのアンケート調査を中心に、住民への聞き取り調査とアイヌの人々への聞き取り調査のデータを一部使いながら、アイヌ民族多住地域としての新ひだか町への評価を明らかにする。その際、「年齢」(20～30歳代の「青年層」、40～50歳代の「壮年層」、60歳以上の「老年層」)、「地域」(新ひだか町内の「静内地区」と「三石地区」)、「出身地」(新ひだか町で生まれたか否か)¹⁾、そして「ジェンダー」の4変数の違いに着目しながら分析を進めたい。なお、一般住民へのアンケート調査には、一部アイヌ系住民からの回答も含まれるが、回答者数が少ないので、アイヌ系住民については年齢別にわけずに分析をする²⁾。「出身地」については、「居住年数」は「年齢」と効果が重なる部分もありうるので、「生まれたときから新ひだか町で暮らしている」のか、「新ひだか町に転入して生活している」のかの違いを検討してみたい。さらに、「ジェンダー」については、松本の研究グループでは、それほど明瞭な違いは指摘されていないが、小内透らの研究グループの研究成果(小内編 2010, 2012)からは、アイヌの人々の生活や意識にジェンダーの違いがみられる部分も明らかになっていることから、一つの分析視点として取り入れたい。

第2節 地域に対する意識

第1項 居住地域別にみた意識

それでは最初に、新ひだか町に暮らす人々の地域に対する意識を確認したい。まず、居住地域別にみた地域に対する意識を表9-1にまとめた。これをみると、三石地区では全般的に肯定的な回答が多いことがわかる。「1. 住民のまとまりが強い」については、肯定的な見解(「とてもそう思う」+「ある程度そう思う」、以下同様)が59.1%と半数を超える。それは、日常的なつきあいの密接さにも支えられており、「4. 日常的なつきあいが盛ん」については、63.4%が肯定的な見解を示している。また新住民を受け入れる素地もあり、「2. 新しく来た人でもなじみやすい」については61.9%が肯定的な回答をしている。その結果、「3. 誰でも自由にものが言える」については56.3%が肯定するように、新旧問わず、しがらみを気にせずに生活できる様子もうかがえる。一方、「5. 昔からの習慣・文化を大事にする」という側面も強く、この点は67.0%が肯定している。ただし、このように昔ながらのものを重視する姿勢は新しいものを取り入れる意識の乏しさにつながるところもあり、「7. 新しいものを積極的に取り入れる気風がある」については、69.0%が否定的な見解(「あまりそう思わない」+「まったくそう思わない」、以下同様)を示している。さらに、「6. 昔から住んでいる人の意見が強い」についても66.4%が肯定しており、表面的には「誰でもものが言える」けれども、地域運営に関わる人々の流動性が低調であることもうかがえる。

これに対し、静内地区は、より閉鎖的な印象を持つ住民が多い。「2. 新しく来た人でもなじみやすい」については、62.7%が肯定しており、新住民があからさまに排除されることはあまりないこ

とがみてとれる。しかし、「6. 昔から住んでいる人の意見が強い」については53.1%が肯定し、「7. 新しいものを積極的に取り入れる気風がある」については64.5%が否定している。「5. 昔からの文化・習慣を大事にする」については否定的な見解が50.4%となっており、昔からの文化・習慣を重視する姿勢は強くないようであるが、人や方法の面では昔ながらの地域運営がなされていることがうかがえる。そのため、「3. 誰でも自由にものが言える」についても53.4%が否定しており、人々が声を上げづらい状況が見出される。このような地域のあり方にはなじめない住民も多いようで、「4. 日常的なつきあいが盛ん」については56.3%が否定している。その結果、「1. 住民のまとまりが強い」についても、56.6%が否定することにつながっている。隣接する地域でありながら、地域のつながりについては三石地区と静内地区で大きな差が存在することがわかる。

また、年齢の違いに着目すると、静内地区・三石地区を問わず、年齢が高いほど地域に対してポジティブな評価をし、年齢が低いほどネガティブな評価をする傾向が見出される。

一方、エスニシティの観点からみると、三石地区のアイヌ系住民は、総じて一般住民と同じような回答の傾向となった。「7. 新しいものを積極的に取り入れる気風がある」については否定的な見解（71.4%）が多く、それ以外の項目については肯定的な評価が過半数となっていた。これに対し、静内地区のアイヌ系住民は、一般住民よりも地域にポジティブな評価をしていた。静内地区の一般住民では「2. 新しく来た人でもなじみやすい」以外のポジティブな評価は多数派とはなっていなかったが、アイヌ系住民の回答では、「2. 新しく来た人でもなじみやすい」は75.0%が肯定しているのに加え、「4. 日常的なつきあいが盛ん」は54.6%が、「3. 誰でも自由にものが言える」については54.6%が肯定的な回答を示している。この「3. 誰でも自由にものが言える」については、三石地区のアイヌ系住民も71.5%という高い割合で肯定的な見解を示しており、アイヌ系住民にとって今の新ひだかは「誰でも自由にものが言える」と強く感じる状況になっていることがうかがえる。

ただし、「5. 昔からの文化・習慣を大切にすること」については、三石地区のアイヌ系住民の71.5%が肯定的な回答をしているのに対し、静内地区のアイヌ系住民は63.6%が否定的な見解を示すといった形で対照的な様相を示している。

以上のことから、両地域とも、「新しく来た人でもなじみやすく」、「昔からの文化・習慣を大事に」しているが、「昔から住んでいる人の意見が強く」、「新しいものを積極的に取り入れる気風」には乏しいという状況が浮かび上がる。また、地域の違いに着目すると、三石地区に比べ、静内地区では「住民のまとまり」が弱く、「誰でも自由にものが言える」雰囲気は乏しく、「日常的なつきあい」があまり活発ではないという状況がみられる。年齢の違いをみると、総じて、地域にとってポジティブな評価を与えるのが老年層であり、ネガティブな評価を与えているのが青年層・壮年層であることが多かった。一方、エスニシティに注目すると、アイヌ系住民は基本的には全体の傾向とほぼ同じであり、静内地区では一般住民よりもポジティブな評価を行っていることが多かった。とくに「3. 誰でも自由にものが言える」については、両地区ともアイヌ系住民の間で強く肯定されていた。これに対し、「5. 昔からの文化・習慣を大事にする」では、居住地域によってアイヌ系住民の見解がわかれ、三石地区では肯定の度合いが高かったのに対し、静内地区では否定の度合いが高くなっていた。このことは、地域におけるアイヌの人々が、発言をしづらい状況から徐々に解放されてきている様子をうかがわせる一方で、静内地区では、昔からのアイヌ文化が尊重されていないことを問

題にする意向が強いのだと考えられる。そこには、第1節でふれた「シャクシャインの末裔」としての静内地区アイヌ系住民のメンタリティが関わっているのかもしれない。

表9－1 居住地区別にみた地域に対する意識

		静内地区				N	三石地区				N
		とてもそう 思う	ある程度 そう思う	あまりそう 思わない	まったく そう思わ ない		とてもそう 思う	ある程度 そう思う	あまりそう 思わない	まったく そう思わ ない	
１．住民のまとまりが強い											
一般住民	青年層	3.1	32.3	53.8	10.8	65	-	36.8	47.4	15.8	19
	壮年層	2.2	36.7	53.2	7.9	139	5.0	45.0	45.0	5.0	40
	老年層	3.8	48.7	42.3	5.1	156	5.1	74.4	20.5	-	39
	計	3.1	41.1	48.6	7.2	360	4.1	55.1	35.7	5.1	98
アイヌ系住民		9.1	9.1	81.8	-	11	14.3	42.9	42.9	-	7
計		3.2	40.2	49.6	7.0	371	4.8	54.3	36.2	4.8	105
２．新しく来た人でもなじみやすい											
一般住民	青年層	7.7	44.6	43.1	4.6	65	-	57.9	36.8	5.3	19
	壮年層	2.9	47.6	41.7	4.8	84	-	52.5	35.0	12.5	40
	老年層	4.8	63.6	29.1	2.4	165	15.4	59.0	23.1	2.6	39
	計	4.6	57.7	33.1	4.6	369	6.1	56.1	30.6	7.1	98
アイヌ系住民		8.3	66.7	25.0	-	12	14.3	42.9	28.6	14.3	7
計		4.7	58.0	32.8	4.5	381	6.7	55.2	30.5	7.6	105
３．誰でも自由にものが言える											
一般住民	青年層	3.1	30.8	53.8	12.3	65	-	36.8	47.4	15.8	19
	壮年層	2.2	36.0	55.4	6.5	139	7.5	42.5	45.0	5.0	40
	老年層	7.6	51.3	38.0	3.2	158	10.8	59.5	29.7	-	37
	計	4.7	41.7	47.5	6.1	362	7.3	47.9	39.6	5.2	96
アイヌ系住民		9.1	45.5	45.5	-	11	42.9	28.6	14.3	14.3	7
計		4.8	41.8	47.5	5.9	373	9.7	46.6	37.9	5.8	103
４．日常的なつきあいが盛ん											
一般住民	青年層	-	30.8	60.0	9.2	65	-	63.2	31.6	5.3	19
	壮年層	2.2	39.6	54.7	3.6	139	2.5	57.5	35.0	5.0	40
	老年層	3.8	46.2	48.1	1.9	158	13.2	55.3	31.6	-	38
	計	2.5	40.9	52.8	3.9	362	6.2	57.7	33.0	3.1	97
アイヌ系住民		9.1	45.5	45.5	-	11	14.3	42.9	28.6	14.3	7
計		2.7	41.0	52.5	3.8	373	6.7	56.7	32.7	3.8	104
５．昔からの文化・習慣を大事にする											
一般住民	青年層	6.2	36.9	49.2	7.7	65	5.3	68.4	21.1	5.3	19
	壮年層	2.9	41.7	47.5	7.9	139	12.5	42.5	40.0	5.0	40
	老年層	12.0	45.6	36.1	6.3	158	10.8	64.9	24.3	-	37
	計	7.5	42.5	42.8	7.2	362	10.4	56.2	30.2	3.1	96
アイヌ系住民		9.1	27.3	63.6	-	11	28.6	42.9	28.6	-	7
計		7.5	42.1	43.4	7.0	373	11.7	55.3	30.1	2.9	103
６．昔から住んでいる人の意見が強い											
一般住民	青年層	21.9	34.4	35.9	7.8	64	26.3	52.6	21.1	-	19
	壮年層	12.9	44.6	39.6	2.9	139	30.0	50.0	17.5	2.5	40
	老年層	10.9	36.5	49.4	3.2	156	5.3	42.1	44.7	7.9	38
	計	13.6	39.3	43.2	3.9	359	19.6	47.4	28.9	4.1	97
アイヌ系住民		25.0	33.3	41.7	-	12	-	57.1	42.9	-	7
計		14.0	39.1	43.1	3.8	371	18.3	48.1	29.8	3.8	104
７．新しいものを積極的に取り入れる気風がある											
一般住民	青年層	3.1	23.1	56.9	16.9	65	-	10.5	68.4	21.1	19
	壮年層	-	32.4	55.4	12.2	139	5.0	17.5	55.0	22.5	40
	老年層	6.9	36.2	46.2	10.6	160	5.4	45.9	43.2	5.4	37
	計	3.6	32.4	51.6	12.4	364	4.2	27.1	53.1	15.6	96
アイヌ系住民		-	18.2	63.6	18.2	11	-	28.6	71.4	-	7
計		3.5	32.0	52.0	12.5	375	3.9	27.2	54.4	14.6	103

注) 1. 単位＝人、％。
2. 不明・無回答を除く。

第2項 出身地の違いからみた地域に対する意識

続いて、出身地の違いに着目して、地域に対する意識をみたい。ここでは、新ひだかの出身か否かの2つのカテゴリーにわけて検討する。この点を、表9－2にまとめた。これをみると、新ひ

だか出身の方が総じて、地域に対してポジティブな評価を行っていることがわかる。「7. 新しいものを積極的に取り入れる気風がある」については63.6%、「1. 住民のまとまりが強い」については54.8%が否定的な見解を示している。また、「6. 昔から住んでいる人の意見が強い」についても55.1%が肯定するなど、これらの項目については地域へのネガティブな評価が多数派となっている。しかし、これ以外の項目についてはポジティブな評価が多数派であり、「2. 新しく来た人でもなじみやすい」では65.5%、「3. 誰でも自由にものが言える」では53.8%、「4. 日常的なつきあいが盛ん」では54.4%、「5. 昔からの文化・習慣を大事にする」では56.4%が肯定的評価となっている。

これに対し、新ひだか以外の出身者は、ややネガティブな評価を行っている。「2. 新しく来た人でもなじみやすい」(59.9%が肯定)、「5. 昔からの文化・習慣を大事にする」(50.1%が肯定)、「6. 昔から住んでいる人の意見が強い」(57.9%が肯定)、「1. 住民のまとまりが強い」(52.1%が否定)、「7. 新しいものを積極的に取り入れる気風がある」(67.2%) については、おおむね新ひだか出身者と同様の傾向をみせている。しかし、残りの「3. 誰でもものが言える」については55.4%、「4. 日常的なつきあいが盛ん」については57.4%が否定的見解を示しており、新ひだか出身者とは対照的な結果となっている。新ひだか出身者が感じているよりは、新ひだか以外の出身者にとっての地域の魅力はやや低調なものであることがうかがえる。

年齢に着目すると、老年層がポジティブな評価、青年層や壮年層がネガティブな評価になりやすいという違いは確認される。一点注目されるのは、新ひだか出身の壮年層であり、「5. 昔からの文化・習慣を大事にする」について、新ひだか出身者では、老年層の66.1%、青年層の62.8%が肯定的見解を示しているのに対し、壮年層では53.1%が否定的見解をみせている。このことは、より若い青年層には気づきにくいのが、新ひだかでの一定の生活経験のある壮年層にとっては「昔からの文化・習慣」が適切に扱われていない状況が感じられるものと思われる。

アイヌ系住民の状況をみると、新ひだか出身者が相対的にポジティブ、新ひだか以外の出身者が相対的にネガティブである状況は一般住民と同様である。ただし、新ひだか以外の出身者では、「2. 新しく来た人でもなじみやすい」、「3. 誰でも自由にものが言える」、「4. 日常的なつきあいが盛ん」の3項目で肯定・否定がともに50.0%となっている。来住の際のなじみにくさはアイヌ系住民の方がやや強く感じるようであるが、その後の声の上げやすさやつきあいの活発さについては、一般住民よりもポジティブな評価が与えられている。また、新ひだか出身のアイヌ系住民の場合、「6. 昔から住んでいる人の意見が強い」で同じように肯定・否定が50.0%ずつとなっており、一般住民に比べるとネガティブ色が薄い。これらの点から、アイヌ系住民であることは、来住の場合には地域になじむことに負担を感じさせるが、それ以外の面では、むしろ一般住民よりも地域をポジティブに評価させる傾向があることがわかる。このことは、「以前に比べてよくなった」という時間的な変化と、「前に住んでいたところに比べてよくなった」という空間的な変化の2つの変化がもたらしたものと考えられる。

ただし、「5. 昔からの文化・習慣を大事にする」については、新ひだか以外の出身のアイヌ系住民では75.0%が肯定しているが、新ひだか出身のアイヌ系住民で57.1%が否定的な見解を示している。新ひだか出身のアイヌ系住民は、「昔からの文化・習慣」としての「アイヌ文化」が尊重されていないという問題意識をより強くもっていることがうかがわれる。

このように、新ひだか以外の出身者は、新ひだかという地域に対してややネガティブな評価をもっ

ているが、この点について、一般住民への聞き取り調査のなかで、次のような語りが聞かれた。

もともと住んでいる人達が7割で、年代が変わって、私のような3割くらいは新住民だと思うんですね。町内会は昔からのやり方で30何年前からのやりかたで、ずっと延々と続いている。だんだん行事も少なくなっている。参加されない方もいて、考え方や生活スタイルが違うので。昔からいらっしゃる方たちは、定年退職されて、高齢化になって70代、80代で、実際に働いている方とのズレもありますよね。そういうので、昔からのやり方をずっと続けていらっしゃるのに、私のような人間は反発している。(一般住民・老年層・女性・新ひだか以外の出身)

このように、住民構成の変化に、地域の体制が適応できずに昔ながらのやり方を引きずっていると感じる新住民は少なくないようである。

以上から、全体として新ひだか出身者に比べて、新ひだか以外の出身者の方が、新住民への閉鎖性や交流の不活発さなど、地域に対するネガティブな評価を強くもっていることがわかる。世代別にみると、老年層の方がポジティブな評価になっていたが、やはり新ひだか以外の出身者では、老年層でもややネガティブな評価が目立った。一方、アイヌ系住民については、新住民のなじみやすさについては、新ひだか出身者がポジティブな評価を示す一方で、新ひだか以外の出身者では一般住民よりもネガティブな評価となっていた。このことは、アイヌ系住民の来住にあたっては、「新住民」と「アイヌ民族」という二重の障壁でもって地域への関わりを妨げられてしまうことを物語る。ただしその反面、新ひだかでの生活が長くなれば、アイヌ民族の復権と再生のなかでのアイヌ民族を取り巻く状況の変化もあってか、新ひだかは一定の居心地のよさを感じる地域になってくる様子もみられる。その居心地のよさは、新ひだか出身のアイヌ民族にも共通しているように見受けられる。

表9-2 出身地別にみた地域に対する意識

		新ひだか出身				N	新ひだか以外の出身				
		とてもそう 思う	ある程度 そう思う	あまりそう 思わない	まったく そう思わ ない		とてもそう 思う	ある程度 そう思う	あまりそう 思わない	まったく そう思わ ない	N
1. 住民のまとまりが強い											
一般 住民	青年層	-	27.9	58.1	14.0	43	4.8	38.1	47.6	9.5	42
	壮年層	3.1	38.1	48.5	10.3	97	2.4	39.0	54.9	3.7	82
	老年層	4.1	56.8	36.5	2.7	74	3.9	51.2	39.5	5.4	129
	計	2.8	42.5	46.3	8.4	214	3.6	45.1	45.8	5.5	253
アイヌ系住民		14.3	28.6	57.1	-	14	-	-	100.0	-	4
計		3.5	41.7	46.9	7.9	228	3.5	44.4	46.7	5.4	257
2. 新しく来た人でもなじみやすい											
一般 住民	青年層	9.3	46.5	37.2	7.0	43	2.4	47.6	47.6	2.4	42
	壮年層	3.1	59.8	29.9	7.2	97	1.2	52.4	36.6	9.8	82
	老年層	12.2	60.8	23.0	4.1	74	3.6	63.3	30.2	2.9	139
	計	7.5	57.5	29.0	6.1	214	2.7	57.4	35.0	4.9	263
アイヌ系住民		13.3	60.0	26.7	-	15	-	50.0	25.0	25.0	4
計		7.9	57.6	28.8	5.7	229	2.6	57.3	34.8	5.2	267
3. 誰でも自由にのめが言える											
一般 住民	青年層	2.3	37.2	46.5	14.0	43	2.4	26.2	59.5	11.9	42
	壮年層	4.1	39.2	49.5	7.2	97	2.4	35.4	57.3	4.9	82
	老年層	11.0	63.0	23.3	2.7	73	6.2	47.7	43.1	3.1	130
	計	6.1	46.9	39.9	7.0	213	4.3	40.2	50.4	5.1	254
アイヌ系住民		28.6	35.7	35.7	-	14	-	50.0	25.0	25.0	4
計		7.5	46.3	39.6	6.6	227	4.3	40.3	50.0	5.4	258
4. 日常的なつきあいが盛ん											
一般 住民	青年層	-	48.8	39.5	11.6	43	-	26.2	66.7	7.1	42
	壮年層	2.1	45.4	49.5	3.1	97	2.4	42.7	50.0	4.9	82
	老年層	8.1	58.1	32.4	1.4	74	3.8	42.3	51.5	2.3	130
	計	3.7	50.5	41.6	4.2	214	2.8	39.8	53.5	3.9	254
アイヌ系住民		14.3	42.9	42.9	-	14	-	50.0	25.0	25.0	4
計		4.4	50.0	41.7	3.9	228	2.7	39.9	53.1	4.3	258
5. 昔からの文化・習慣を大事にする											
一般 住民	青年層	7.0	55.8	32.6	4.7	43	4.8	31.0	54.8	9.5	42
	壮年層	6.2	40.6	42.7	10.4	96	3.7	43.9	48.8	3.7	82
	老年層	15.3	52.8	27.8	4.2	72	9.9	45.8	38.2	6.1	131
	計	9.5	47.9	35.5	7.1	211	7.1	42.7	44.3	5.9	255
アイヌ系住民		21.4	21.4	57.1	-	14	-	75.0	25.0	-	4
計		10.2	46.2	36.9	6.7	225	6.9	43.2	44.0	5.8	259
6. 昔から住んでいる人の意見が強い											
一般 住民	青年層	31.0	35.7	26.2	7.1	42	14.3	42.9	38.1	4.8	42
	壮年層	14.6	44.8	35.4	5.2	96	19.3	48.2	32.5	-	83
	老年層	5.5	38.4	52.1	4.1	73	11.6	39.5	45.0	3.9	129
	計	14.7	40.8	39.3	5.2	211	14.6	42.9	39.8	2.8	254
アイヌ系住民		14.3	35.7	50.0	-	14	20.0	60.0	20.0	-	5
計		14.7	40.4	40.0	4.9	225	14.7	43.2	39.4	2.7	259
7. 新しいものを積極的に取り入れる気風がある											
一般 住民	青年層	2.3	25.6	48.8	23.3	43	2.4	14.3	69.0	14.3	42
	壮年層	1.0	29.9	55.7	13.4	97	1.2	28.0	54.9	15.9	82
	老年層	8.1	43.2	41.9	6.8	74	5.3	35.1	47.3	12.2	131
	計	3.7	33.6	49.5	13.1	214	3.5	29.4	53.3	13.7	255
アイヌ系住民		-	21.4	71.4	7.1	14	-	25.0	50.0	25.0	4
計		3.5	32.9	50.9	12.7	228	3.5	29.3	53.3	13.9	259

注) 1. 単位=人、%。

2. 不明・無回答を除く。

第3項 ジェンダーの違いからみた地域に対する意識

さらに、ジェンダーの違いに着目して、地域に対する意識の状況を確認したい。この点を、表9-3にまとめた。これをみると、いくつかの項目では、それほど大きなジェンダー差はないことがわかる。「1. 住民のまとまりが強い」については男性の53.2%、女性の53.8%が否定、「2. 新しく来

た人でもなじみやすい」については男性の55.6%、女性の65.0%が肯定、「5. 昔からの文化・習慣を大事にする」については男性の52.8%、女性の53.2%が肯定、「7. 新しいものを積極的に取り入れる気風がある」については男性の62.1%、女性の68.9%が否定的な見解を示している。

ただし、「6. 昔から住んでいる人の意見が強い」については、男性が60.3%、女性が53.0%と、ともに肯定的見解が多数にはなっているが、男性の方でややその割合が高い。また、「4. 日常的なつきあいが盛ん」については、男性の54.2%は否定的な回答だが、女性の50.6%は肯定的な回答をしている。さらに、「3. 誰でも自由にものが言える」については男性の53.0%が肯定的な回答をしているのに対し、女性は54.7%が否定的な回答をしている。このことは、ジェンダーによって活動の場に差が存在することが関係していると思われる。女性の方が「日常的なつきあいが盛ん」だと答えていることから、女性の方で私的領域での活動が盛んであることがうかがえる。一方、男性は相対的に公的領域に関わる程度が高いために、「昔から住んでいる人の意見が強い」ことを実感する場面に会うことが多くなっているものと思われる。さらに、女性は公的領域から遠ざけられることも多いため、「自由にものが言える」とは感じられにくくなっているのだと考えられる。

年齢の違いについては、居住地域や出身地からみた場合と同様、年齢が高い方でポジティブな、年齢が低い方でネガティブな評価がなされている。ただし、「2. 新しく来た人でもなじみやすい」については、男性では青年層（肯定が47.6%）・壮年層（肯定が49.4%）と老年層（肯定が73.0%）の間で評価の違いが大きく開くのに対し、女性では青年層（肯定が58.2%）と壮年層（肯定が66.7%）・老年層（肯定が65.5%）の間で開きが生じている。このように、世代の違いを乗り越える時点にジェンダーの差が存在するところもあり、女性では壮年層の段階で老年層と近くなる一方で、男性は壮年層を終えるまで老年層とは一線を画す状況が見出される。男性の壮年層については、「5. 昔からの文化・習慣を大事にする」についても60.9%が否定的見解を示しており、男性の世界では壮年層と老年層の間に意識の違いが強く存在していることがわかる。

一方、アイヌ系住民については、一般住民よりもジェンダー差がみられておらず、アイヌ系住民というエスニシティで共有される意識が強いことがうかがわれる。ただし、「4. 日常的なつきあいが盛ん」については、男性では肯定・否定がともに50.0%であるのに対し、女性では62.5%が肯定と、一般住民と同様に女性で私的領域でのつきあいが活発になされていることがうかがえる。一方、「3. 誰でも自由にものが言える」については、男性で60.0%、女性で62.5%が肯定しており、アイヌ住民内のジェンダー差は存在しないが、一般住民の女性に比べてアイヌ系住民の女性が高い割合で肯定していることがわかる。このことは、アイヌ女性の公的領域への関わりが以前に比べて進んでいることを感じさせる。それに対し、「6. 昔から住んでいる人の意見が強い」については、男性の55.6%、女性の62.5%が肯定しており、ともに肯定的見解が多数派ではあるが、一般住民と逆に、女性の方でより肯定の程度が高いことがわかる。これらのことは、アイヌ系住民男性の場合は、「まだ昔に比べればマシ」との意識がある一方で、公的領域への関わりを増したアイヌ女性の方で、「昔から住んでいる人の意見が強い」と感じられることが多いのではないかと考えられる。

以上から、特徴的な部分を振り返ると、「3. 誰でも自由にものが言える」と「4. 日常的なつきあいが盛ん」で大きなジェンダー差がみられ、女性では「ものが言え」ないけれど、「つきあいは盛ん」と回答する者が多かった。これは、女性においては、公的領域への参入にまだ障壁を感じやすいことと、家族や近隣などの私的領域での交流の活発さがみられることを示しているものと考えられる。

しかし、アイヌ女性の場合は、「ものが言える」 ことについては肯定する者が多かった。このことは、アイヌ女性の方が、かつてに比べれば発言権が与えられていることを実感しやすくなっていることを物語るとも考えられ、それだけ以前のアイヌ女性が置かれた状況の深刻さをうかがうことができるだろう。

表9－3 ジェンダー別にみた地域に対する意識

		男性				N	女性				N
		とてもそう 思う	ある程度 そう思う	あまりそう 思わない	まったく そう思わ ない		とてもそう 思う	ある程度 そう思う	あまりそう 思わない	まったく そう思わ ない	
1. 住民のまとまりが強い											
一般住民	青年層	2.4	38.1	45.2	14.3	42	2.3	27.9	60.5	9.3	43
	壮年層	2.3	34.5	51.7	11.5	87	3.2	41.9	51.6	3.2	93
	老年層	2.0	58.2	39.8	-	98	5.7	48.6	37.1	8.6	105
	計	2.2	45.4	45.4	7.0	227	4.1	42.3	46.9	6.6	241
アイヌ系住民		10.0	20.0	70.0	-	10	12.5	25.0	62.5	-	8
計		2.5	44.3	46.4	6.8	237	4.4	41.8	47.4	6.4	249
2. 新しく来た人でもなじみやすい											
一般住民	青年層	7.1	40.5	47.6	4.8	42	4.7	53.5	37.2	4.7	43
	壮年層	3.4	46.0	40.2	10.3	87	1.1	65.6	26.9	6.5	93
	老年層	6.0	67.0	26.0	1.0	100	7.1	58.4	29.2	5.3	113
	計	5.2	54.1	35.4	5.2	229	4.4	60.2	29.7	5.6	249
アイヌ系住民		9.1	54.5	27.3	9.1	11	12.5	62.5	25.0	-	8
計		5.4	54.2	35.0	5.4	240	4.7	60.3	29.6	5.4	257
3. 誰でも自由にものが言える											
一般住民	青年層	2.4	35.7	52.4	9.5	42	2.3	27.9	53.5	16.3	43
	壮年層	4.6	40.2	52.9	2.3	87	2.2	35.5	52.7	9.7	93
	老年層	4.2	62.1	32.6	1.1	95	11.1	45.4	38.9	4.6	108
	計	4.0	48.7	44.2	3.1	224	6.1	38.5	46.7	8.6	244
アイヌ系住民		20.0	40.0	30.0	10.0	10	25.0	37.5	37.5	-	8
計		4.7	48.3	43.6	3.4	234	6.7	38.5	46.4	8.3	252
4. 日常的なつきあいが盛ん											
一般住民	青年層	-	42.9	54.8	2.4	42	-	32.6	51.2	16.3	43
	壮年層	2.3	36.8	56.3	4.6	87	2.2	50.5	44.1	3.2	93
	老年層	4.2	48.4	45.3	2.1	95	6.4	47.7	44.0	1.8	109
	計	2.7	42.9	51.3	3.1	224	3.7	46.1	45.3	4.9	245
アイヌ系住民		10.0	40.0	40.0	10.0	10	12.5	50.0	37.5	-	8
計		3.0	42.7	50.9	3.4	234	4.0	46.2	45.1	4.7	253
5. 昔からの文化・習慣を大事にする											
一般住民	青年層	9.5	47.6	40.5	2.4	42	2.3	39.5	46.5	11.6	43
	壮年層	6.9	32.2	52.9	8.0	87	3.3	51.1	39.1	6.5	92
	老年層	8.3	55.2	31.2	5.2	96	15.0	42.1	37.4	5.6	107
	計	8.0	44.9	41.3	5.8	225	8.3	45.0	39.7	7.0	242
アイヌ系住民		10.0	40.0	50.0	-	8	25.0	25.0	50.0	-	8
計		8.1	44.7	41.7	5.5	235	8.8	44.4	40.0	6.8	250
6. 昔から住んでいる人の意見が強い											
一般住民	青年層	26.2	40.5	28.6	4.8	42	19.0	38.1	35.7	7.1	42
	壮年層	22.1	44.2	31.4	2.3	86	11.7	47.9	37.2	3.2	94
	老年層	8.4	44.2	43.2	4.2	95	10.3	34.6	51.4	3.7	107
	計	17.0	43.5	35.9	3.6	223	12.3	40.3	43.2	4.1	243
アイヌ系住民		18.2	36.4	45.5	-	11	12.5	50.0	37.5	-	8
計		17.1	43.2	36.3	3.4	234	12.4	40.6	43.0	4.0	251
7. 新しいものを積極的に取り入れる気風がある											
一般住民	青年層	2.4	31.0	57.1	9.5	42	2.3	9.3	60.5	27.9	43
	壮年層	1.1	26.4	55.2	17.2	87	1.1	31.2	55.9	11.8	93
	老年層	5.1	44.9	44.9	5.1	98	7.5	31.8	45.8	15.0	107
	計	3.1	35.2	51.1	10.6	227	4.1	27.6	52.3	16.0	243
アイヌ系住民		-	30.0	50.0	20.0	10	-	12.5	87.5	-	8
計		3.0	35.0	51.1	11.0	237	4.0	27.1	53.4	15.5	251

注) 1. 単位＝人、％。

2. 不明・無回答を除く。

第3節 町内会活動への参加

次に、住民たちの町内会活動への参加状況をみたい。町内会にどの程度参加しているかをみると、住民たちの地域の公的領域への参加状況や参加意志を把握することができると考えられる。

そこで、この点をまとめた表9-4をみると、まず居住地区については、静内地区で「参加している」とする者（「積極的に参加している」＋「ある程度参加している」、以下同様）が64.6%、三石地区では79.6%と、三石地区の住民の方が町内会活動に積極的に参加していることがわかる。アイヌ系住民については、静内地区では66.7%が参加傾向が強いのに対し、三石地区では42.9%にとどまっており、三石地区のアイヌ系住民の方が町内会への関わりの程度が低いことがわかる。年齢層でみると、年齢の高い方で参加傾向が強く、静内地区の老年層では85.1%、三石地区の老年層では97.6%が「参加している」と答えている。表9-1では、三石地区のアイヌ系住民は、静内地区のアイヌ系住民に比べて地域に対してポジティブな評価をしている状況がみられたが、このことと老年層以外の町内会への参加の低調さをあわせて考えると、町内会をはじめとした地域への関わりをあまりもたないがゆえに問題のない地域生活を送ることができるという、いわば「セグリゲーションによる生活共生」（小内 2001：367）に近いような状況が顕現していると捉えられるかもしれない。

続いて、出身地に着目すると、新ひだか出身者では77.7%が「参加している」と答えているのに対し、新ひだか以外の出身者では67.3%が「参加している」とし、やや少なくなっている。アイヌ系住民については、新ひだか出身者の場合は62.5%が「参加している」とする一方、新ひだか以外の出身者では「参加している」が50.0%と、やはり新ひだか以外の出身者の方が参加の程度が低い。年齢層でみると、世代が上になるほど差が開いており、新ひだか出身の老年層では92.4%が「参加している」と答えているのに対し、新ひだか以外の出身の老年層では84.2%が「参加している」と答えていて、相対的にはやや少なくなっている。

ジェンダーに注目すると、男性では69.9%が「参加している」と答えている一方、女性では「参加している」とする者は65.5%とやや少なくなっている。アイヌ系住民については、男性の69.3%が「参加している」が、女性では44.4%しか「参加している」と答えていない。年齢別にみると、下の世代ほど差が大きくなっており、男性の青年層では40.5%が「参加している」と答えているが、女性の青年層では25.6%しか「参加している」と答えておらず、ジェンダーの違いが目立っている。表9-3でみたように、「誰でも自由にものが言える」という点を肯定する者が女性では少なかったが、このことは、ここで確認したように、町内会などの地域の公的領域が女性にまだ十分には開かれていない状況と符合するだろう。そして、その女性と公的領域との間の壁は、「年齢の若さ」と「アイヌ」であるということによって、より厚くなっていることもうかがえる。

以上から、町内会の参加については、年齢が上の世代で、三石地区の居住、新ひだかの出身者、そして男性であるほど活発になることがうかがえた。ただし、アイヌ系住民では、三石地区の居住者の参加の程度が低いことから、地域の公的領域への消極的な関わりと、そうであるがゆえの地域への評価の高さが生じている可能性も見出された。

表9-4 町内会への参加状況

		積極的に 参加して いる	ある程度 参加して いる	あまり参加 していない	まったく 参加して いない	N	積極的に 参加して いる	ある程度 参加して いる	あまり参加 していない	まったく 参加して いない	N
		静内地区					三石地区				
一般住民	青年層	6.2	21.5	24.6	47.7	65	10.5	42.1	26.3	21.1	19
	壮年層	17.1	38.6	26.4	17.9	140	31.7	48.8	14.6	4.9	41
	老年層	25.7	59.4	9.7	5.1	175	36.6	61.0	2.4	-	41
	計	19.2	45.3	18.4	17.1	380	29.7	52.5	11.9	5.9	101
アイヌ系住民		26.7	40.0	20.0	13.3	15	14.3	28.6	57.1	-	7
計		19.5	45.1	18.5	17.0	395	28.7	50.9	14.8	5.6	108
		新ひだか出身					新ひだか以外の出身				
一般住民	青年層	9.3	25.6	27.9	37.2	43	4.8	26.2	21.4	47.6	42
	壮年層	21.6	41.2	24.7	12.4	97	17.9	39.3	23.8	19.0	84
	老年層	34.2	58.2	5.1	2.5	79	22.6	61.6	10.3	5.5	146
	計	23.7	44.3	18.3	13.7	219	18.4	49.3	16.2	16.2	272
アイヌ系住民		12.5	50.0	31.2	6.2	16	50.0	-	33.3	16.7	6
計		23.0	44.7	19.1	13.2	235	19.1	48.2	16.5	16.2	278
		男性					女性				
一般住民	青年層	9.5	31.0	28.6	31.0	42	4.7	20.9	20.9	53.5	43
	壮年層	24.7	36.0	23.6	15.7	89	16.0	44.7	24.5	14.9	94
	老年層	36.2	53.3	5.7	4.8	105	18.3	66.7	10.8	4.2	120
	計	27.1	42.8	16.5	13.6	236	15.2	51.0	17.5	16.3	257
アイヌ系住民		38.5	30.8	23.1	7.7	13	-	44.4	44.4	11.1	9
計		27.7	42.2	16.9	13.3	249	14.7	50.8	18.4	16.2	266

注) 1. 単位=人、%。
2. 不明・無回答を除く。

第4節 定住意識とその理由

第1項 定住意識の状況

それでは、上記のような地域への関わりと意識をもつ新ひだかの住民たちは、今後の定住についての意識をどのようにもっているのだろうか。この点を、表9-5にまとめた。これをみると、まず静内地区の住民は定住志向（「今の場所にずっと住みたい」）が66.1%、三石地区の場合は68.7%と、ほぼ同じ割合になっている。一方、アイヌ系住民の場合は、静内地区で85.7%が定住志向、三石地区では100%が定住志向をもっている。アイヌ系住民の場合、定住志向以外の回答は「わからない」のみであり、「別の場所に移りたい」や「別の場所に移る予定がある」と答えた者は皆無で、非常に強固な定住志向をもつことがわかる。年齢別にみると、上の世代になるほど定住志向が高く、静内地区の老年層では82.3%、三石地区の老年層では90.0%が定住志向をもっている。

一方、出身地についてみると、新ひだか以外の出身者では60.4%が定住志向をもつのに対し、新ひだか出身者では76.7%が定住志向をもっている。この傾向は、アイヌ系住民においても同様で、新ひだか以外の出身者の場合は66.7%が定住志向を示しているが、新ひだか出身者では100%が定住志向をもっていることがわかる。年齢別にみると、若い世代ほど定住意識に差があり、新ひだか出身の青年層では55.8%が定住志向をみせるのに対し、新ひだか以外出身の青年層では29.3%が定住志向を示すにすぎず、「わからない」が31.7%となっている。

ジェンダーの違いに着目すると、男性では67.5%が定住志向をもち、女性では67.7%が定住志向をもっているといった形で、ジェンダー差は存在していない。アイヌ系住民でも、男性の92.3%が定住志向、女性の87.5%が定住志向と、ほとんど差はみられない。ただし、年齢別にみると、青年層では男性でやや定住志向が弱く、青年層の女性の47.6%が定住志向をもつのに対し、青年層の男性では38.1%にとどまっている。

全体としては7割程度の住民が定住志向をもっているが、とくに年配で、新ひだか出身であるほどその傾向は強くなっている。また、アイヌ系住民についていえば、「わからない」を除くと定住志向は100%であり、現在の新ひだかでの生活を続けたいと強く考えていることがわかる。

表9-5 今後の定住意識

		今の場所に ずっと住み たい	別の場所 に移りたい	別の場所に 移る予定が ある	わからない	N	今の場所に ずっと住み たい	別の場所 に移りたい	別の場所に 移る予定が ある	わからない	N
静内地区							三石地区				
一般住民	青年層	40.6	17.2	15.6	26.6	64	52.6	15.8	-	31.6	19
	壮年層	57.4	14.9	6.4	21.3	141	55.0	17.5	5.0	22.5	40
	老年層	82.3	5.1	1.7	10.9	175	90.0	2.5	-	7.5	40
	計	66.1	10.8	5.8	17.4	380	68.7	11.1	2.0	18.2	99
アイヌ系住民		85.7	-	-	14.3	14	100.0	-	-	-	7
計		66.8	10.4	5.6	17.3	394	70.8	10.4	1.9	17.0	106
新ひだか出身							新ひだか以外の出身				
一般住民	青年層	55.8	14.0	7.0	23.3	43	29.3	19.5	19.5	31.7	41
	壮年層	69.8	10.4	-	19.8	96	42.4	22.4	12.9	22.4	85
	老年層	92.3	1.3	1.3	5.1	78	79.5	6.8	1.4	12.3	146
	計	75.1	7.8	1.8	15.2	217	60.3	13.6	7.7	18.4	272
アイヌ系住民		100.0	-	-	-	15	66.7	-	-	33.3	6
計		76.7	7.3	1.7	14.2	232	60.4	13.3	7.6	18.7	278
男性							女性				
一般住民	青年層	38.1	19.0	14.3	28.6	42	47.6	14.3	11.9	26.2	42
	壮年層	56.3	16.1	8.0	19.5	87	56.2	15.6	4.2	24.0	96
	老年層	85.6	3.8	1.9	8.7	104	82.5	5.8	0.8	10.8	120
	計	66.1	11.2	6.4	16.3	233	67.1	10.9	3.9	18.2	258
アイヌ系住民		92.3	-	-	7.7	13	87.5	-	-	12.5	8
計		67.5	10.6	6.1	15.9	246	67.7	10.5	3.8	18.0	266

注) 1. 単位=人、%。
2. 不明・無回答を除く。

第2項 定住志向の理由

続いて、定住志向をもつ住民に、その理由を尋ねた結果を検討する。この点を、表9-6にまとめた。まず居住地区の違いに着目すると、静内地区では「ここに土地や家があるから」がもっとも多く63.5%、次いで「生活環境がよいから」が44.9%となっている。他は20%に満たない。三石地区では、静内地区と同じように「ここに家や土地があるから」がもっとも多く70.7%、次に「生活環境がよいから」が42.7%、さらに「人間関係がよいから」も28.0%となっている。アイヌ系住民の場合は、静内地区では全体と同じような傾向で、「ここに土地や家があるから」が50.0%、「生活環境がよいから」が41.7%となっている。三石地区では、全体で多かった「ここに土地や家があるから」(71.4%)、「生活環境がよいから」(57.1%)のほか、「人間関係がよいから」(28.6%)、「職場や学校が近いから」(28.6%)も比較的多くの回答を集めている。

年齢の違いに着目すると、静内地区の青年層では「職場や学校が近いから」が50.0%と最も多く、「親の面倒を見るため」も30.8%と比較的高い。「親の面倒」については壮年層も35.8%と高い割合を示している。三石地区では、「職場や学校が近いから」はあまり多くなく、「土地や家」「生活環境」「人間関係」に加えて、青年層・壮年層では「親の面倒」が多くなっている。「その他」については、「気候が良い」「いなかが好き」「行く所がない」などが挙げられている。

これらをみると、「土地や家」「生活環境」が定住志向の基本的な理由でありつつ、三石地区では、アイヌ系住民も含めて他にも理由が挙げられることが多い。とくに、三石地区のアイヌ系住民では、一般住民からはほとんど挙げられなかった「職場や学校が近い」という理由も高い割合になってお

り、三石地区のアイヌ系住民の労働世界も、ある程度三石地区内に存在することがうかがえる。ただし、静内地区のアイヌ系住民の場合、「人間関係がよいから」を挙げるものは8.3%と少なく、第1節でふれた宇田川（1998）の知見である、アイヌの人々が人間関係を重視しているという傾向とは少し異なる。

出身地については、新ひだか出身者では「ここに土地や家があるから」が65.7%と最も多く、以下、「生活環境がよいから」(38.8%)、「親の面倒を見るため」(23.0%)、「人間関係がよいから」(20.8%) など、さまざまな理由が挙げられている。一方、新ひだか以外の出身者の場合、「ここに家や土地があるから」(64.3%)、「生活環境がよいから」(49.4%) 以外は、それほど目立った選択肢はない。アイヌ系住民の場合は、「土地や家」と「生活環境」が高い割合となっているが、それ以外がそれほど多くの回答を集めていないという点では、とくに新ひだか出身の場合で一般住民との間に比較的大きな差が生じている。年齢層に着目すると、とりわけ新ひだか以外の出身の青年層で「職場や学校」を選ぶ者が50.0%と多く、新ひだか町への居住が、まさに仕事上の理由で行われた可能性が高いといえる。このことから、出身地については、新ひだか出身の方が、「土地や家」や「生活環境」以外の理由が多く、それだけ地域に強固につながとめられていると考えられる。しかし、アイヌ系住民の場合は、新ひだか出身者でも「土地と家」「生活環境」以外の回答はあまりなされておらず、和人の出身者であればいろいろな「結びつき」もあって定住志向が強まるところ、アイヌ系住民はそういった「結びつき」はあまりもっていないと考えることができる。

ジェンダーの違いをみると、男性では「ここに土地や家があるから」(68.7%) や「生活環境がよいから」(42.2%) が多い。女性でもほぼ同様に、「ここに家や土地があるから」(61.7%) と「生活環境がよいから」(45.6%) に加えて、「人間関係がよいから」(21.7%) も多くなっている。アイヌ系住民の場合、男性では「土地や家」(58.3%) と「生活環境」(50.0%) が多く、他があまり目立たない点では男性全体の傾向と似ている。これに対し、アイヌ女性の場合、「その他」以外のすべての選択肢が2割以上の回答を集めており、アイヌ女性では現住地との間に様々な接点が存在することがうかがえる。年齢層の違いでいうと、若い世代ほど多くの選択肢が選ばれる状況が見て取れ、とくにそれが女性に顕著になっている。

以上をまとめてみると、「土地や家」と「生活環境」が定住志向の基本的な理由であるが、年齢が若いほど、また三石地区の居住であるほど、あるいは新ひだかの出身であるほど、さらには女性であるほど、そしてアイヌ系住民であるほど、多くの理由が挙げられやすいことがわかる。これらの特徴を持つ人々は、現住地に多くの魅力や利点が存在していると把握することができる。

ただし、アイヌ系住民に関していうと、静内地区、あるいは男性では「人間関係がよいから」を選ぶ者が少なくなっていた。このことは、アイヌ系住民のなかでも、静内地区の居住者や男性では、人間関係のよさを感じにくい状況にあったこともうかがえる。

表9-6 定住志向の理由（複数回答）

		生活環境がよいから	人間関係がよいから	親の面倒を見るため	ここに土地や家があるから	職場や学校が近いから	その他	N	生活環境がよいから	人間関係がよいから	親の面倒を見るため	ここに土地や家があるから	職場や学校が近いから	その他	N
		静内地区							三石地区						
一般住民	青年層	30.8	11.5	30.8	38.5	50.0	7.7	26	40.0	30.0	20.0	60.0	10.0	-	10
	壮年層	46.9	16.0	35.8	65.4	24.7	2.5	81	31.8	31.8	40.9	72.7	9.1	4.5	22
	老年層	46.5	15.3	4.9	68.1	5.6	6.2	144	47.2	25.0	2.8	72.2	2.8	2.8	36
	計	45.0	15.1	17.5	64.1	16.3	5.2	251	41.2	27.9	17.6	70.6	5.9	2.9	68
アイヌ系住民		41.7	8.3	8.3	50.0	8.3	8.3	12	57.1	28.6	14.3	71.4	28.6	14.3	7
計		44.9	14.8	17.1	63.5	16.0	5.3	263	42.7	28.0	17.3	70.7	8.0	4.0	75
		新ひだか出身							新ひだか以外の出身						
一般住民	青年層	29.2	16.7	33.3	50.0	33.3	8.3	24	41.7	16.7	16.7	33.3	50.0	-	12
	壮年層	35.8	22.4	43.3	64.2	16.4	4.5	67	58.3	13.9	25.0	72.2	30.6	-	36
	老年層	43.1	22.2	2.8	73.6	2.8	4.2	72	47.4	13.8	6.9	65.5	6.0	6.0	116
	計	38.0	21.5	23.9	66.3	12.9	4.9	163	49.4	14.0	11.6	64.6	14.6	4.3	164
アイヌ系住民		46.7	13.3	13.3	60.0	20.0	6.7	15	50.0	25.0	-	50.0	-	25.0	4
計		38.8	20.8	23.0	65.7	13.5	5.1	178	49.4	14.3	11.3	64.3	14.3	4.8	168
		男性							女性						
一般住民	青年層	31.2	12.5	25.0	50.0	56.2	6.2	16	35.0	20.0	30.0	40.0	25.0	5.0	20
	壮年層	40.8	20.4	30.6	67.3	24.5	4.1	49	46.3	18.5	42.6	66.7	18.5	1.9	54
	老年層	43.8	10.1	6.7	74.2	9.0	3.4	89	47.5	23.2	4.0	63.6	1.0	7.1	99
	計	41.6	13.6	16.2	69.5	18.8	3.9	154	45.7	21.4	19.1	61.8	9.2	5.2	173
アイヌ系住民		50.0	8.3	-	58.3	8.3	16.7	12	42.9	28.6	28.6	57.1	28.6	-	7
計		42.2	13.3	15.1	68.7	18.1	4.8	166	45.6	21.7	19.4	61.7	10.0	5.0	180

注) 1. 単位＝人、％。
2. 不明・無回答を除く。

第3項 移住志向と移住予定の理由

それでは、「別の場所に移りたい」という移住志向をもつ住民の回答から、その理由を探りたい。この点を、表9-7にまとめた。これをみると、まず静内地区では「その他」(30.0%)、「よい仕事がないから」(26.0%)、「生活環境が悪いから」(24.0%)などが多くなっている。三石地区では、「交通の便が悪いから」がもっとも多く53.8%、次いで「生活環境が悪いから」が46.2%、「その他」が30.8%となっている。「仕事」や「生活環境」を挙げる者は、とくに若い世代で多くなっている。「その他」の理由としてもっとも多く挙げられているのは「病院がない」ということであり、医療・福祉施設の不足が、この地を離れたいという希望をもたせる理由の一つになっている。また、一人だけであるが、「私のことを悪く利用する人がいるから（アイヌ人）」と回答した住民もいる。和人である「私」を「アイヌ人が悪く利用する」と訴えているもので、詳細は不明であるが、アイヌ系住民に対するネガティブな思いが完全に払拭されているわけではない状況もみられる。

出身地に注目すると、新ひだか出身者では「生活環境が悪いから」(31.8%)のほか、「よい仕事がないから」(31.8%)や「人間関係が悪いから」(22.7%)などの回答が多い。一方、新ひだか以外の出身者では、医療・福祉施設の不足等が挙げられている「その他」(37.2%)、「交通の便が悪いから」(32.6%)などが多く、インフラ面での問題を強く感じていることがわかる。

ジェンダーに着目すると、男性では「生活環境が悪いから」(29.4%)、「その他」(29.4%)、「よい仕事がないから」(20.6%)などが多くなっており、女性では「交通の便が悪いから」(38.7%)、「その他」(32.3%)、「生活環境が悪いから」(25.8%)などが多くなっている。全体的に女性が多く選択肢を選んでおり、女性の方により問題が集中しやすい傾向を見て取ることができる。

表 9－7 移住志向の理由（複数回答）

		生活環境が悪いから	人間関係が悪いから	交通の便が悪いから	別の場所に土地や家があるから	よい仕事がないから	職場や学校が遠いから	その他	N	生活環境が悪いから	人間関係が悪いから	交通の便が悪いから	別の場所に土地や家があるから	よい仕事がないから	職場や学校が遠いから	その他	N
		静内地区								三石地区							
一般住民	青年層	43.8	18.8	25.0	6.2	37.5	6.2	18.8	16	33.3	-	33.3	-	-	33.3	33.3	3
	壮年層	13.0	13.0	17.4	8.7	30.4	-	30.4	23	55.6	33.3	66.7	11.1	11.1	11.1	22.2	9
	老年層	18.2	9.1	18.2	27.3	-	-	45.5	11	-	-	-	-	-	-	100.0	1
	計	24.0	14.0	20.0	12.0	26.0	2.0	30.0	50	46.2	23.1	53.8	7.7	7.7	15.4	30.8	13
		新ひだか出身								新ひだか以外の出身							
一般住民	青年層	42.9	14.3	14.3	-	28.6	14.3	14.3	7	41.7	16.7	33.3	8.3	33.3	8.3	25.0	12
	壮年層	23.1	30.8	15.4	-	38.5	-	23.1	13	25.0	10.0	45.0	15.0	15.0	5.0	30.0	20
	老年層	50.0	-	50.0	-	-	-	-	2	9.1	9.1	9.1	27.3	-	-	63.6	11
	計	31.8	22.7	18.2	-	31.8	4.5	18.2	22	25.6	11.6	32.6	16.3	16.3	4.7	37.2	43
		男性								女性							
一般住民	青年層	54.5	9.1	18.2	9.1	9.1	9.1	18.2	11	25.0	25.0	37.5	-	62.5	12.5	25.0	8
	壮年層	16.7	27.8	16.7	-	33.3	-	27.8	18	33.3	6.7	53.3	20.0	13.3	6.7	26.7	15
	老年層	20.0	-	20.0	-	-	-	60.0	5	12.5	12.5	12.5	37.5	-	-	50.0	8
	計	29.4	17.6	17.6	2.9	20.6	2.9	29.4	34	25.8	12.9	38.7	19.4	22.6	6.5	32.3	31

注) 1. 単位＝人、％。
 2. 不明・無回答を除く。
 3. アイヌ系住民で移住志向を示した人はいなかった。

移住予定者については絶対数が少ないので、移住予定の理由について全体をまとめたものを表 9－8 として掲げる。これをみると、「転勤があるから」がもっとも多く、53.3%にのぼっていることがわかる。次いで「その他」が33.3%となっているが、その中身は、「自家に誰もいない為」や「親の意見」、「実家があるから」など、家族の生活の拠点が新ひだか以外にあることをうかがわせるものが多くなっている。

表 9－8 移住予定の理由

就職するから	3.3
転勤があるから	53.3
結婚するから	-
進学するから	10.0
その他	33.3
N	30

注) 1. 単位＝人、％。
 2. 不明・無回答を除く。

第 5 節 アイヌ民族多住地域に関わる認識

最後に、アイヌ民族多住地域としての新ひだか町に関わる聞き取りを、いくつか紹介しておきたい。まず、住民調査からは、以下のような話が聞かれた。

この地区はなかなかアイヌの方々、……何て言うんでしょうか、和人をはなす（和人と距離をとる——新藤注）ようなそういう感じがございますね。私はそれなりのおつきあいはございます。アイヌという言葉それ自体を、要するに本当に同化がされていますんで、本当にアイヌという血筋の方はいらっしゃいますけど、なかなか「私はアイヌです」と名乗る方は少ないです。そういうような関係上、私どももアイヌという言葉を出していいのかどうかというのはあります。私自体はそういうお友だちもおりますので、この方ですと容易にその話はいたします。でも、やはり一般的にそういう話ができるかどうかというのはございますね。

そして、自分たちが「私はアイヌです」と言える方はそういらっしやいません。この地区では。
(一般住民・老年層・男性・新ひだか以外の出身)

このように、友だちと呼べるような間柄になっていても、なかなかアイヌ系住民の方から自分がアイヌであることを告白しづらい状況は存在している。ただし、この方も、『私はアイヌです』とはいわないけれど、この人はアイヌ民族ではないだろうか」と感じることはあるということであり、一般住民にも、それなりにアイヌの方はわかっているようである。また、アイヌの人たちは「地域の部落の名前を取ってつけている。山のほうはそういうふうに名前をつけて、名字をつけている。今でもわかるよ」(一般住民・老年層・男性・新ひだか以外の出身)ともいわれており、名前でアイヌの人かどうかともわかるようである。和人との混血も進み、見た目だけではアイヌの人々の存在は目立たなくなってきた側面もあるのかもしれないが、地元で暮らしている人々には、アイヌ民族であるかどうかがある程度認識されているものと考えられる。

また、「何かその一つの企業さんがその(アイヌ民族の——新藤注)血筋の人らしいですね。そういう話は聞きましたけど」(一般住民・青年層・男性・新ひだか以外の出身)という語りもあるように、「この会社はアイヌの人が多らしい」ということで、アイヌ民族であるかどうか判断されている様子もみられる。この点は、アイヌ系住民からも、以下のような形で語られた。

結構うちの妹が働いていた……会社とかも、アイヌしか働いてないとかとみんなにいわれていて、そういう人が集まる会社とかってあるんですけど、そういう人を遣っているのかどうか、選んでいるのかわからないんですけど。静内は結構あるんですよ。私も一番最初に働いたところの従業員がほとんどそうだったんです。……そういうふうに集まっちゃうのかなと思って、それは感じたことがあります。……みんな働きやすくていくのかわからないんですけど、そういう会社というのはあるんですよ、従業員がアイヌだというのが多いところがあるから。(アイヌ系住民・青年層・女性・新ひだか出身)

このことから、アイヌの人々の側にも、特定の職場に集まっているという認識はもたれているようである。だからといって、つきあいが無いわけではないが、踏み込みづらいつ感じている様子もうかがえる。たとえば、一般住民からは、次のような話が聞かれた。

そういうこと(アイヌ民族であること——新藤注)を気にする人もいるし、気にしない人もいるから、あまりおおっぴらにいえないんだよね。気にしている人もいるし。そこのところはデリケートな部分だから、いえないんだよね。どこまで、どうやっていっていいのかっていうのがね。となり近所だし。(一般住民・壮年層・女性・新ひだか以外の出身)

ただし、政策に対する意見は第8章で扱われるようにある程度出されているが、一般住民から、アイヌ系住民が多く暮らす新ひだかという地域に対する評価はあまり聞かれなかった。これらをふまえると、新ひだかは間違いなくアイヌ民族多住地域の一つではあるが、そのことはあまり意識しないようにするという姿勢もみえてくるように思われる。

第6節 小括——三者三様の「共生の作法」

それでは、以上の検討をふまえ、おもだった部分を振り返っておきたい。

第1に、住民の地域への評価については、老年層、三石地区、新ひだか出身、男性の住民であるほどポジティブになっていた。そのこととも関わって、これら以外の住民層は町内会活動への参加があまり積極的ではなかった。そのため、地域への評価と町内会活動への参加は、一定の相関関係があることがわかる。また、このことは定住志向の強さにも反映していたが、全体としては7割近くの住民が定住志向をもっており、いずれも高い水準のなかで若干の差が生じるようになっていた。

第2に、アイヌ系住民の状況をみると、一般住民とそれほど大きな差は存在していなかった。細かくみると、一般住民での地域への評価が低かった静内地区、新ひだか以外の出身者などでは、一般住民以上にポジティブな評価も見られた。その反面、三石地区や女性のアイヌ系住民では、町内会など地域への参加が低調である状況もみられた。このことは、ある局面においては「アイヌ民族である」ということと一定の属性が重なることで問題がより困難なものになることや、かつての問題が深刻であったことを示しているだろう。

ただし第3に、アイヌ系住民は一般住民よりも「誰でも自由にものが言える」地域であることを強く感じていた。このことは、老年層のアイヌ系住民から、「やっぱりそういうふうにやられれば(差別されれば——新藤注)、やっぱり遠くに行きたいわね。あっち、内地のほうへ行けばアイヌっていわれることないもの。北海道にいたらアイヌっていわれるけど、内地へ行けば、……アイヌというような民族はないから。アイヌといったって知らんものね)(アイヌ住民・老年層・男性・新ひだか出身)と語られていたような状況からは、地域が確実に変わりつつあることを感じさせる。それだけ、アイヌ民族についても復権と再生の動きが強まり、アイヌ系住民が暮らしやすい状況が実現されてきたものと受け止められる。

そのこともあってか、第4に、アイヌ系住民の定住志向は非常に強かった。第4節でも触れたように、アイヌ系住民は移住志向や移住予定をもつ者はおらず、ほとんどが定住志向をもっていた。その理由は「土地や家」の存在とともに、「生活環境のよさ」と説明されており、アイヌの人々にとって新ひだかは住みやすい地域になっていることがわかる。

第5に、その住みやすさを、静内地区のアイヌ系住民は「参加して勝ち取っていこう」という意識がみられた。静内地区のアイヌ系住民は、町内会へ積極的に参加していた。また、「昔からの文化・習慣」としてのアイヌ文化が重視されていないことへの問題意識をもっているように受け止められる様子もみられた。さらに、宇田川(1998)が指摘した「人間関係のよさ」を評価する傾向は低く、「静内の人は差別せずに仲良くつきあってくれるから定住したい」という受動的な意識はあまりもたれていないこともうかがえた。このことは、静内地区のアイヌ系住民が積極的に地域に関わり、伝えるべきことは伝える、という姿勢をもっているとも考えられる。第1節でふれたような「シャクシャインの末裔」としての意識のようなものが、もしかしたら受け継がれているのかもしれない。

それに対して、第6に、三石地区のアイヌ系住民は、町内会にはあまり積極的に関わっていなかった。にもかかわらず、地域への評価は、一般住民以上に高い状況がみられた。このことは、地域にあまり関わらないがゆえに、逆に高い満足度を手に入れるという「セグリゲーションによる生活共生」のような地域での振る舞い方を志向しているようにも受け止められる。

一方、第7に、一般住民の側からは、アイヌ民族多住地域としての新ひだか町に対する評価は、

ポジティブなもの、ネガティブなものいずれも、あまり聞かれなかった。このことは、一般住民がアイヌ系住民の存在を認識していないことを示すわけではない。むしろ、職場や近所づきあい、あるいは名字などを手がかりに、「誰がアイヌ民族であるのか」についてはかなり鋭敏に感じ取っているともいえる。しかし、そのような「アイヌ民族多住地域」ということはあまり意識せず、普段はこの点にはふれないようにしている様子も見出された。そのような姿勢で、新ひだかでの生活を続けていく姿がみてとれる。

このことから、静内地区のアイヌ系住民は「参加」、三石地区のアイヌ系住民は「セグリゲーション」、そして一般住民は「意識しない」という、三者三様のあり方で「アイヌ民族多住地域」での共生を実現させていると考えられる。ただし、今回の調査で取り上げたアイヌ住民の調査データはあまりにも少ない。そこで今後は、ここで見出された三者三様の「共生の作法」を一つの手がかりとして、さらに「アイヌ民族多住地域」を生きる住民たちの意識や行動を明らかにすることが求められよう。

注

- 1)ここでは本人の「新ひだか町への来住時期」をもとに、「生まれてからずっと」を「新ひだか出身」、それ以外を「新ひだか以外の出身」とした。
- 2)アイヌ系住民には、「本人がアイヌの血筋」という方の他に、「自身は和人だが、アイヌの人と結婚した(和人配偶者)」と「自身は和人の生まれだが、アイヌの家庭に養子に入った(和人養子)」という方々も含まれる。ただし、後二者はごく少数であることと、主観的なレベルでは一定のアイヌのエスニシティをもっていると考えられることから、ここではアイヌ系住民として一括りにして扱う。

参考文献

- 松本和良・江川直子編, 2001, 『アイヌ民族とエスニシティの社会学』学文社.
- 松本和良・石郷岡泰・太田博雄, 1998, 「ウタリ社会と差別・偏見——浦河町の社会調査」松本和良・大黒正伸編『ウタリ社会と福祉コミュニティ——現代アイヌ民族をめぐる諸問題』学文社, 24-71.
- 松本和良・大黒正伸編, 1998, 『ウタリ社会と福祉コミュニティ——現代アイヌ民族をめぐる諸問題』学文社.
- 大黒正伸, 2001, 「アイヌ民族の日常的リアリティ——白老町と門別町の調査から」松本和良・江川直子編『アイヌ民族とエスニシティの社会学』学文社, 134-60.
- 小内透, 2001, 「日系ブラジル人の定住化と地域社会の変化」小内透・酒井恵真編著『日系ブラジル人の定住化と地域社会——群馬県太田・大泉地区を事例として』御茶の水書房, 351-73.
- 編著, 2010, 『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その1 現代アイヌの生活と意識——2008年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書』北海道大学アイヌ・先住民研究センター.
- 編著, 2012, 『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容——2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書』北海道大学アイヌ・先住民研究センター.

武田朋久，2001，「門別におけるアイヌ民族とエスニシティの問題」松本和良・江川直子編『アイヌ民族とエスニシティの社会学』学文社，53-79.

宇田川拓雄，1998，「ウタリ社会の住み心地——浦河町の事例」松本和良・大黒正伸編『ウタリ社会と福祉コミュニティ——現代アイヌ民族をめぐる諸問題』学文社，72-88.

(新藤 慶)